

ANALYSE ET COMMENTAIRE DE TEXTES OU DOCUMENTS EN  
JAPONAIS

Durée : 6 heures

Analysez et commentez, en japonais, le texte suivant :

森のユートピアの系譜

海上知明・国士館大学非常勤講師＝環境思想史

「ユートピア」という言葉は、400年前に、英国の哲学者トマス・モアが「どこにもない場所」という意味で作り上げた造語だといわれる。一般には願望の現れ、ありもしない空想世界ということで、軽い意味で使われていた。

●二つのユートピア

このユートピアに思想的な意味づけをしたのがハンガリー生まれの社会思想家カール・マンハイムである。優れた先人が、進行しつつある危機を人より先に知り、その解決方法を「ユートピア」という形で表現しているとマンハイムは考え「早熟の現実」と定義した。ここから、ユートピアは単なる願望から思想へと昇格する。

ユートピアは二つの大きな流れを持ち、その時々によってどちらかの流れが勢いづいた。テクノピア(科学技術によるユートピア)とエコトピア(エコロジー秩序の中のユートピア)とである。

テクノピアとエコトピアには本質的な優劣はなく、あるのは求める時代なのだろう。過ぎ去った20世紀、最大の問題は「ユートピアの不在」であった。しかし、文学作品はともかく、ユートピアはさまざま場所に見え隠れしていた。身近な例として日本の場合はどうであろうか。

●テクノピアの盛衰

日本で、「ユートピア」を提供していたのはマンガのようだ。自分の子どもの時代にはテレビの中はテクノピアの世紀であり、進んだ科学技術世界から来たヒーローが活躍する世界が広がっていた。

他の惑星から来たソラン、パピイ、宇宙エース、海底都市から来たオスパー、特にスーパージェッターの語る未来は、科学技術の力で気象さえもコントロールしていた。ウルトラマンの「光の国」さえもテクノピアに思えた。

おそらく、このルーツの最も古いものが、「鉄腕アトム」であろう。人間の善悪さえも見分ける10万馬力の少年ロボットは、まさに「科学の良心」でもあった。そしてこのテクノピアの流れに「ドラエモン」があり、もっともユートピアを必要としている子どもたちに、現在も未来への希望をあたえ続けている。

しかし、70年代の公害と石油危機とが未来のイメージを暗いものにし、テクノピアに翳りをもたらした。当時の少年にとって、銀幕界の2大スーパースターは東宝のゴジラと大映のガメラ。水爆と破壊の象徴であったゴジラは、しだいに対戦相手を宇宙からの侵略者へと移していったが、1971年に戦ったのは公害怪獣ヘドラだった。そして同年、ガメラが戦ったジクラも公害がらみの侵略者であった。

しかし、なんといっても公害をクローズアップさせたのは「スペクトルマン」であった。ここに登場する侵略者・宇宙猿人ゴリは、公害で地球を汚す人間を滅ぼすために、公害をもとにした怪獣を次々と作っていた。だが、公害が取り上げられても、ヒーローがそれと戦う姿には救いがあった。始末におえないのは終末論の台頭である。

ユートピアには反ユートピア、「デストピア」が存在する。ルネッサンス期の知識人だったノストラダムスという人物は、解釈によっていかようにも解釈できる難解な詩を残し、多くの悪のりの解釈をもたらした。「1999年に人類が亡ぶ」と強引に解釈した著書がベストセラーになったのもその例であろう。

これは最悪のデストピアであった。その後、不安は具体的なイメージとなって膨らんでいく。人気番組だったNHK少年ドラマシリーズの第一回「タイムトラベラー」(1972年)の舞台は、科学の進んだ未来に設定されていた。

しかし、「未来からの挑戦」では未来は暗いものになっており、1978年放映の「その町を消せ」で登場した異次元世界は、配給と戒厳令下にあった。こうした不安と環境悪化のなかに、エコトピアが浮上してくる。テクノピアの限界がエコトピアを必要としたともいえるだろう。

Tournez la page S.V.P.

### ●エコトピアの世紀

「ゲゲゲの鬼太郎」の原典は貸本マンガである。その時代に鬼太郎は、京王線の沿線にある調布市布田に住んでいた。それが時代の推移とともに、ゲゲゲの森へと住居を移している。妖怪とは、自然の精霊と解釈してもよいであろう。人間を受け入れ、それでいて精霊の住むゲゲゲの森こそは、エコトピアであった。

思想史上の「エコトピア」は100年ほど前、英国人で本の装丁で美術的にも高い評価を得ている社会主義思想家ウィリアム・モリスという人が書いた『無可有郷便り』が最初とされている。

それは、進行しつつある産業革命に対する批判の書でもあった。モリスの描くエコトピアは、遠い未来世界で、美しい森林の中に住居が点在し、労働は楽しみと奉仕のためのものとされ、家具も品物の多くも手作りであるような世界だった。森林のなかで芸術が日常にいきづく世界、これが彼のエコトピアの原点である。

しかし、願望としてのエコトピアなら古代から存在していた。ギリシャのアルカディアでも、中国の桃源郷でも、そのほとんどは森林の中の楽園である。日本にも森の奥に隠れ里があった。なぜ人々は森林にユートピアを見たのだろうか。アジア全般では森林がもたらす様々な恵みが期待されたのだろう。だからこそ、それを持たないイスラムの人々は、水と緑にあふれた天国を夢見たのだろう。

テクトピアに押されがちなながらも、ヨーロッパでは束縛のない自由の象徴として森林への憧憬はあった。三権分立論で名高いモンテスキューは「自由はゲルマンの森から」と強調している。

さらに現在はモリス的に、産業化に疲れた人々の「精神の荒廃」も影響しているようだ。そこでは樹木が持つ「癒し」の力、森林が包む「気」の力が人々を引きつけている。

千葉県鎌ヶ谷市で「癒し」系の雑貨を扱うHEAVENという店があるが、ならんでいるのは木製品ばかりである。店長の小森さんに理由を尋ねてみた。「自然素材をつかい、手作りであることが、温もりを伝えているからです」、そして「室内にいて樹木の中にいられる感覚が求められていますから」と付け加えられた。

すでに、日常の中にさえ森林が求められているようだ。自分はそこに「早熟の現実」としてのエコトピアの萌芽を見た気がする。ユートピアは現在を生きる我々の心の中にこそ存在するからだ。

グリーン・パワー 2003年1月